

怒りの現象学的心理学

山根 一郎

1. 感情（情感性）の再評価

感情は、知性や感覚と並列される心的機能の1つとして従来捉えられてきた。しかし心理学の発展に伴って、このような画然とした並立は心というはたらきの実態に即していないという見方がひろまってきている。そのような再編成において、感情についても個々の感情の背後にあるより大きな概念が必要になってきた。それは雑多な感情の単なる総称としてではなく、個々の感情の背後にあり、個々の感情の発現を可能にする心的機能の存在である。

たとえば戸田（1992）の「アージ（urge）・システム」という概念は、食欲や好奇心なども含む「感情概念を拡張した、遺伝的に基本枠が設定された行動選択・実行用の心的ソフトウェア」であり、野生環境に適合した適応行動選択システムである。実はこのような感情を中心とした心のモデルは最近の心理学だけの発見ではない。たとえば日常で使われる「気持ち」という表現は、好き嫌いという通常の感情から、「気持ち悪い」というような体感や内臓感覚的感情までも含み、感情が中心となる幅広い心的状態性を意味している。また「思い」という表現も冷静な知性的思考に記憶や感情も加わった総合的思念作用を含意しており、そこでの非知性部分が強調されると「想い」という字が充てられる。「気持ち」や「思い」の上位概念である「心^{こころ}」（heart, mind）という日常語自体、「精

神」とは異なり、知性ではなく感情を中心とした心の状態（＝情態）そのものを含意している。

心理学以外の哲学的現象学の世界でも、感情を人間の体験の中心的是たらきと捉える視点が、主知主義（認識論）的思潮の後退とともに顕著になってきた。そのきっかけを与えたのはハイデガー（Hiedegger, M）の現存在分析（1927）における情態性（Befindlichkeit）である。現存在（私）の世界への被投性という在り方として気分づけられているというこの情態性の現象学は、身体の状態感を含む感情的情感性（affectivité）として、アンリ（Henry, M）やシュミッツ（Schmitz, H）に受け継がれている。

ここでいう情態性・情感性は、個々の感情の発現を可能にし、通底し、持続している現象をさす。それは「アージ・システム」のような感情概念の水平的拡張でも、また上層的（＝俯瞰的）総称でもなく、感情の地平を下から支える基盤的現象の概念であり、感情という存在者（後述）の存在を可能にする存在論的カテゴリーである。

このような個々の感情の背後に措定された概念装置は、個々の感情の存在を根拠づけるものであるが、それが単なる説明のための概念装置で終わらずに、実在する状態として見出す（出会う）ためには、個々の感情たちによって逆に根拠づけられる必要がある。本稿はこのような目的での感情各論の一環である。

2. 現象学的心理学とは

以上の問題を探求する本稿の立場を「現象学的心理学」と名乗る。本稿では、まずはこの立場の説明に紙幅を費やさねばならない。この名称の意図するところは、それがいわゆる（科学的）心理学とも（哲学的）現象学とも同一ではなく、その双方を媒介する混合態という点にある。その特徴を両者に対する差異として示す。

2.1 科学的心理学との違い

以下、通常のアカデミックな心理学を「科学的心理学」と表現する。それとの違いは、立脚点と探求の視点にある。

まず立脚点の違いとして、現象学的心理学は、科学的心理学によって問われなかった前提を問うことから始める。そもそも「現象学」であるとは、フッサール（Husserl, E）的に言えば、あらゆる先入見を（可能な限り）排して、事象そのものに向かうことである。すなわち、すでに既知とされているもの、たとえば個々の先行研究に共通している発想（前提、地平、パラダイム）を前提として、その上に立って次なる知を蓄積するのではなく、その当然視された前提を問い直すことから始まる。これは先行研究を既知の前提とする仮説検証的発想とは一見正反対にみえるが、両者は研究過程の別の段階を示しているにすぎない。たとえば怒りの尺度を作ろうとする者は、その思いに至った時点ですでに怒りがある特定の内容として了解している。ここで先行研究や常識的通念による前提的了解からの意味づけに依存すれば、怒りについて改めて根源的に問うことはしない。その問いとは「それは何であるのか」という問いであって、それは「何から発生するのか」、「何に対して反応するのか」という問いではない。後者の因果論的・対象論的問いは、前者の問いが得られて初

めて可能となり、後者の問いから始めることは、前者の問いを既知なるものとして素通りすること意味する。同様に尺度化も根源的な問いに対する一応の答え（仮説）を得てはじめて可能になる。尺度化から始めることは、最初にすべき、最初にしかできない真の問いを永遠に不問に付すことになる。

現象学的心理学は、心理学が本来出発すべきその地点から出発する。それは問いに対する科学的客観的な解を追究する過程ではなく、科学的客観性として追究すべき「問い」をまずは発し、前提していた了解を整理する作業である。すなわち、解を見出す手法である科学的心理学の前段階に位置する（この作業は研究過程として正当に扱われず、研究者の頭の中で密かに処理されるため、方法論が成熟しなかった）。ただし、現象学的探求はすぐに科学的探求を導かない。なぜなら、探求の方向は、まずは科学的探求とは正反対の方向、存在論の方向に進むからである。

そもそも「何であるのか」という問いは、「何か」という辞書的意味の問いではなく、その「在る」様態、すなわち存在を問うている。ハイデガーが明確にしたように、「存在」とは存在するモノ（＝存在者）ではなく、「存在するコト」である（両者の差異を「存在論的差異」という）。

「何であるのか」という問いは、存在者を問うのではなく、存在者の存在（様態）を問う。存在者を問うとは、存在者のモノ的性質（長さ、組成、反応傾向等）を問うことであり、心を尺度化して記述する科学的心理学の態度である。それに対して現象学的心理学は、存在するコト、すなわち「いかに現象（現れるモノではなく現れるコト）として与えられているか」を問う。この問いは、心理学の方法論でいえば「妥当性」（測定するものとされるものとの一致）の問いの根拠を問うこと、すなわち測定したい対象は、モノとして在ると措定する以前に、そもそも現実にはどのようなコトとして現象しているのかと問うことである。

「現象学的」とは、現れたモノ（現象者）から出発するのではなく、現象者を現わす現れという作用（＝現象）に立ち戻る態度である。ということは、物理学のような物理的実体（モノ）ではない心理現象（コト）を扱う心理学は、本来的に現象学たるべきではないのか。すなわち、心理の探求とは、それを生物物理的実体に還元することではなく、存在様態を心理現象としてそのまま記述し、その現象の存在構造（その存在を可能にしている構造）を探求することである。といってもそのレベルの探求は、客観的測定ができる領域ではなく、哲学的に綿密な思惟の領域になる。現象学的心理学は思惟（考える）という知的作業の段階なのである。

2.2 哲学的現象学との違い

次に現象学的心理学は、いかなる点で哲学ではなく心理学なのか。存在論哲学は存在者の体験次元内の探求には手を染めようとはしない（できない）ため、心の具体的様態を把握することには関心を示さず（現象学者の中ではシュミッツがそれを試みている）、そのため心理学に取って代わることはできない。

現象学的心理学があくまで哲学ではなく心理学であるのは、存在者から出発し、存在者レベルの具体層の探求を第一とする点である。ただし、その探求は存在論的深化の準備のためという点が、その志向のない科学的心理学とは決定的に異なる。同時に、具体的な体験に準拠することなく、一挙に存在論的世界へ思惟を沈潜させることは、「事象そのもの」から恣意的に離脱する論理的飛躍の危険があり、これこそ科学としての心理学が排除してきた思考癖である。

また現象学的である点とは、知覚できる表層の現象（存在者）から知覚できず思惟によってしか到達できない深層の現象（存在）へ、存在論へ達するのであり、存在から出発してそれを根拠に存在者を説明するという意味での観念論的存在論で

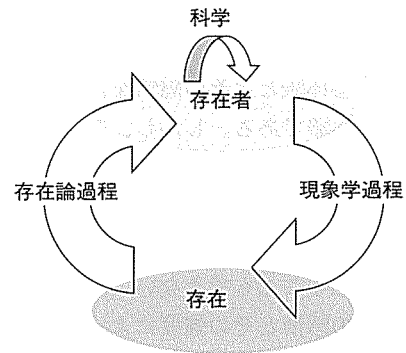


図1 存在者と存在の探求サイクル

はないことを意味する。存在論的には確かに存在が存在者の根拠であるが、現象学的には存在者の現われが存在の手がかりとなる。前者の論理は演繹的であり、後者は帰納的である。現象学は理論から出発する演繹論理ではない。この点で方法的態度としての現象学と、探求の領域次元としての存在論は方向を異にする。しかし、それらは探求の過程の違いにすぎない。存在者から存在へ達するという往きの相が現象学で、存在から存在者へ論じるという還りの相が存在論といえる（図1）。

そもそも現象学的心理学はなぜ存在者（科学）的心理学を超えて存在論へ向かおうとするのか。それは存在論こそが、「（私が、世界が）在るとはということか」という、学という知的営為にめざめた人間が究極的に探求したい本質であり、科学の上位概念である「学」そのものの真の目的だからである。そしてとりわけ感情（情感性）の探求こそが、人間存在（人間であることの意味）の探求につながるとみているからである。

2.3 必要とする前提

しかし現象学的探求にはつねに固有の困難が付きまとう。現象学的探究は、理想的には何も媒介しない直接体験にもとづかなくてはならない。ところが、それが困難なのである。ちなみに存在者（科学）的探求で扱われる「観察された感情」は

感情そのものではなく、感情の記号・表徴にすぎない。

感情の直接体験とはその感情を体験しているその当事者の体験である。しかし、アンリの表現を使えば、「思考を開始することによって感情の隠蔽が起きる」、「世界の言語が沈黙する時、感情それ自体の言語が語りだす」。感情が極度に強ければ、思考を開始することもできない（この困難さは実際には個々の感情とその強度によって異なる）。驚きのような瞬間的に体験する感情は、我に返った時はいつも驚き終っている。それゆえ、探究者は過去の感情体験を表象することしかできず、間接的な体験しか得られない。しかしアンリは、表象された感情は感情ではないという。厳密にはそうかもしれない。ならアンリ自身は、何を根拠に感情のそのような特性を把握できたのか。

現実的に「現象学」が実践可能なのは、生き生きとした現在における前反省的な純粹経験においてではなく、反省的意識という事後的内省においてである。ただしその内省（反省）は、付随してくる解釈を非反省的に温存したままの記憶の素朴な再生ではなく、それらを意識的に取り除くという現象学的反省である。純粹経験はそのままでは知的に把握できない。だから可能な限りそれを知的に把握する作業を事後的になすしかない。反省という事後の表象化が現象学的過程として唯一承認される理由もここにある。結局、たとえ完全に正確ではないにしても、現象学的反省によって表象された感情がもっとも直接体験に近いのである。

ちなみにこの困難さ・不正確さの自覚は現象学的方法の欠点ではなく、むしろ感情の了解者・探究者によって無視されてきた観測誤差の存在を呈示できている。すなわち、一般的に感情について論じるには、（観察された感情を扱う者も常識・既知としている）ある前提に立たざるを得ないことを示している。

現象学的探求が（自らの）前提を問題にするこ

とは、前提を存在悪として無条件に排除するためではなく（それは究極的には不可能）、その前提を自覚し、その前提がどのように探求に影響しうるかを問題にすることである。

そこで、客観的に探求する心理学者だけでなく、アンリなどの現象学者たちもすべてが前提せざるをえない、感情の体験的性質を明確にする。これを前提しなくては、感情を反省的に捉えることは不可能である。その前提とは、感情の明証性と常在性である。

①感情の明証性

誰であっても、怒っている時に今怒っていることを、怒り終れば今しがた怒っていたことを了解でき、またかつての怒りをほかならぬ怒りとして間違わずに想起・思念できる（と信じている）。すなわち感情の真の原因や真の対象は不確かであっても、感情体験そのものは明証（明確）であり、それを把握するのに試行錯誤は必要ないと前提されている。

アンリによればその根拠は、感情は知覚の対象でも知的推論で把握されるものでもなく、感情として直接与えられるためである。しかし直接与えられていることを、アンリを含むわれわれはどうやって知的に把握（学的に確信）できるのか。実は直接与えられているその時、それをその場でそのまま知的に把握はできないというアポリアはアンリの論理自身があらわにしている。

とするなら、この明証性・直接性は、実際には反省的意識によって（ある程度自信をもって）確保された前提というべきであろう。感情がいかに与えられているか、はすでに「前提」として、心理学的にいうなら感情体験の記憶を根拠として、明証的に措定されているのである。

ちなみにこの明証性は、眼前の他者（異種の動物を含む）の感情表出に対しても、すなわち知覚・観察された感情に対しても素朴に適用されている。つまり他者らが表出した感情（これは知覚対象）は、乳幼児から動物行動学者にいたるまで直

感情的（非学習的）に確信される（その確信が正しいかは別）。それゆえ、この表情理解能力は「生得的」と説明される。この「生得性」は明証性の言い換えである。

筆者を含めた怒りを探求する者は、怒りという感情体験を、少なくとも自分のどの感情が怒りであるかはすでに非言語的に了解している。同様に、本稿の読者が、怒りについての筆者の記述に同意や不同意を示せるのも、読者が怒りつつ読んでいるためではなく、読者は怒りについて既に明証的に了解しているためである。

②感情の常在性

感情体験は知性では把握できないというアンリの主張は、感情と知性との両立不能を前提している。確かに、驚きや激しい怒りのような強い情動反応は、思考を停止するかもしれない。しかし、知性と感情は原理的に両立不能かという問いに、明確に「否」と答えたのは、情感性の存在論自身である。情感性は、本人が自覚していなくても、つねにそのつどの情態（感情）で存在している。知性がはたらいっている時も感情はいつでも存在しているとすれば、知性は今起きている感情に気づけないのか。実は知性は気づいている。しかしそれが今「どのように与えられているか」という問いには答えることができない。知性にとって感情は認識対象として外在しているのではないため、感情を対象として直接コントロールできないからである。

常在性の例証として、素人が演劇の台詞を言う場面を挙げてみる。素人が発する台詞は彼の日常会話の時とは異なってきたきこえない棒読みになってしまう。素人は台本の台詞を、自分自身の今の感情状態とは別個の、外なる言葉（書かれた言葉）として発するために、現在の自分の情感性（たとえば緊張感を伴った不安）を抑えることが精いっぱい状態で発語する。それによって、その台詞が内包している情感性が表現されないだけでなく、発話者自身の情感性も表現されなくなるため、

情感性が不在という意味での不自然な語り方（棒読み）となる。そしてその不自然さが、強い感情表出の台詞だけでなく、なにげない日常的台詞に対してこそあらわになるということが、何気ない発話（台詞）においても常に情感性が通底していることが逆説的に明らかになる。また、素人は知性によって期待された感情を知性の操作で表出しようとする。そのため演技として自然に「泣く」ことができない。悲しさを体験し表現するのは知性ではなく情感性である。慣れた役者の知性は、直接泣こうと感情をコントロールするのではなく、悲しい気分を明証性をたよりに的確に導き出すことで、自然な涙を表出できる。

情感性はそのつどの感情として存在しているばかりか、いつでもあらゆる感情として実現できる可能性として常在している。しかもその常在は、流れつつある「今現在」の持続的常在だけではない。過去も未来も、世界側にも常在（遍在）している。だからこそ過去の感情も、他者の感情も、想像された感情もともに生々しく表象することができる。感情の明証性という第一の前提を可能にする更なる前提もこの常在性である。この意味で、感情（情感性）は存在（在ること）そのものである。

2.4 個々の感情の捉え方

以上の視点・前提に立って、これから怒りという感情の存在者レベルの探求にとりかかる。手順として、当該の感情についてまず心理学的知見を整理し、それを批判的に受け止めて現象学的に深めていく。本稿が示すこのような過程は「前存在論的探求」といえる。

その前にまず、ある感情を他の感情や感情全体との関係でどのように位置づけるか、感情全体の意味空間をどのようにとらえるか。既存の3つの視点を比較してみる。

①因子分析的視点

個々の感情を感情全般の「共通因子」のみで記

述する視点であり、科学的心理学が好んで採用している。この視点では、その感情の相対的特徴(相対的個性)は記述できるが、「特殊因子」を誤差として無視するため、その感情の固有性・独自性(絶対的個性)は捉えられない。

②素朴意味論的視点

素朴意味論とは、指示と指示対象との1対1対応を意味現象とする視点である。そこではその感情の固有性のみが記述可能であるが、因子分析視点とは逆に、その感情の構造的位置や他の感情との相対的関係を捉え損なう。

③構造意味論的視点

前二者の欠点を同時に補うには、意味とは他の意味との差異であるという、特定の意味を意味空間内の相対的位置とみなす構造意味論的視点、すなわち個々の意味現象を構造的空間上に配置することである。切り開く意味空間によって個別感情間の類似性、対立性、あるいは無関連(相関)性などを論じることができる(ただし構造的発想のみになると因子分析視点と同じになる)。因子分析モデルと異なるのは、共通因子を本質存在として論じるのではなく、あくまで個別感情の独自性を構造的に捉える点である。本稿でもこの視点で怒りの意味空間を探る。

3. 怒りの心理学

科学(存在者)的心理学は、怒りという現象を、実体的物質のように、そこに在るもの、測定可能なものと前提し、その前提の範囲内でのみ探求しようとする。このような存在者化は、現象学的心理学において、まず第一に乗り越えられるべき先入見であるが、そこで得られた知見の価値まで否定することはない。その知見を結論的にいうと、怒りの普遍的原因はイザード(Izard, C. E., 1991)によれば、「目標定位行動の妨害」であるという。

①進化的起源

怒りの発生を行動生物学に求めれば、「攻撃行動」が該当しよう。ただし攻撃行動でも異種間の捕食行動(狩猟)は、怒りとは直接関連しない。怒りの行動進化的起源を問題にするなら、同種間での攻撃、すなわち、なわばり・雌の獲得・子の保護(これは異種にも対する)としてなされる行動に限定されよう。

それらの中で、戸田(1992)は怒りの進化的起源を「なわばり防衛行動」とした。その行動は、種が遺伝的に共有する行動のルールを守り守らせる働きであり、侵入者に対する警告・威嚇という意味で表現されるという。すなわち、相手に力学的衝撃を与えるのが目的ではなく、それを与える力と意思を表示し、相手をなわばりから去らせるのが目的である。怒りは単純に攻撃行動そのものではないということである。

②生理反応

怒りは、情動反応としてなぜあのような激しい感情爆発(興奮)に達するのか。これは怒りに対する最も重要な疑問の一つである。情動反応としての怒りは、交感神経の激しい興奮と副交感神経の中程度の興奮からなり、温熱性発汗を伴うという(安田、1993)。そして怒りの中枢(促進と抑制)は扁桃核にあるという。

このような存在者の探求は、一見、怒りの現象学的探求にはまったく無関係にみえる。しかし、怒りが脳の一部でコントロールされ、あるいは特定の神経や神経伝達物質に依存しているという客観的事実は、怒りという体験がいかに現象学的になまなましく捉えられようと、まぎれもなく存在(私が在るということ)は身体という存在者によって実現されているという事実性から立脚していることを意味する。すなわち、そもそも、存在の開始も無も、誕生と死という存在者の現象によって成立するという、存在の存在者依存性を受け入れざるを得ないのである。これは実は、存在者性の価値は、存在者の次元内に求められるより

も、存在にかかわることによってはじめて正しく認められることを意味する。存在者性を正しく評価することが前存在論探求の意義でもある。

③表情表出

エクマンら (Ekman, P & Friesen, W. V., 1975) によれば、怒りの表情は攻撃準備 (威嚇) 反応であるという。すなわち、相手をにらむことで目に力が入るため、眉が中央に向かって下がる。また弱い怒りでは口は閉じられるが、怒りが強くなると口が横に開き、噛みつきの威嚇として犬歯を見せるようになる。表情以外にも「怒髪天を衝く」という表現は、怒りに伴い体毛が逆立つのは、威嚇として自分を大きく見せる効果を示している。威嚇という表出行動を伴う怒りはコミュニケーションとして機能している。

また、攻撃行動との関連でいうなら、ダラードら (Dollard, J & Miller, N. E) の「フラストレーション—攻撃説」(frustration-aggression theory) も無視できない。怒りを攻撃準備情態とすると、欲求阻止→怒り→攻撃という連鎖になる。この「欲求阻止」は阻止されるのが行動以前の内的状態という点で、「目標定位行動の阻止」よりも直接体験的で原因としての適用度も高い。ただし攻撃性は攻撃行動を説明するだけの心理学的概念という点で怒りとは異なる。

以上の諸説は、怒りを進化的あるいは発達の起源へ還元する思考に束縛されているため、説明可能な範囲がごく狭い。たとえば、報道で知った無軌道な殺人犯への怒りや公共のマナーを守らない者への怒りのような、自分自身がなんら直接被害を受けていない社会的な怒りを説明できない。

4. 怒りの発生条件

怒りの系統・個体発生的起源や個々の怒りの原因と対象は、ともに怒りという感情体験の外にある。すなわち怒りと関連する外部の存在者にすぎ

ず、怒りそのものではない。怒りについての現象学的問いとは、因果論的発想の問いが素通りしている問い、すなわち「怒るとはどのような体験か」という、怒りが怒っている当事者にいかに体験されているか、いかに現れているかという、問いである。

怒りは怒りとしてどのように本人に与えられているか。ただしそれは今自分が怒っていることを自己知覚論的に把握する根拠を問題にしているのではない (この発想はあいかわらず存在者的である)。アンリによれば、その「どのように」そのものが情感性なのだという。だからアンリは「情感性は情感性として啓示する」という。すなわち怒りは怒りとして (のみ) 与えられる (だから明証なのだ)。しかしそのままでは感情の心理学は存立できない。そこで、感情を知的営為によって把握するために、感情体験の明証性・常在性という前提、すなわち感情は直接体験から遠ざかってもお明証であり続けるという前提を頼って、記憶や例示による追体験や思考実験によって感情への思惟を展開していくことにする。

まず、怒りの (原因より広い) 発生条件を問題にする。怒りは外部の対象によって励起される。非典型の怒りには、明確な対象性を示さない怒りもあるが、その場合でも対象を見出そうとする。怒りの対象は、怒りを伝える対象、すなわち人・集団などの行為主体ではない。怒りそのものの対象は行為、たとえば自分に何がしかの損害をもたらす行為である。

このように怒りは、自分の中の何かが踏みにじられた心的衝撃であり、一種の被害体験であるなら、やはり怒りは「攻撃行動」ではない。すでに古代ローマの哲学者セネカは「怒りは、攻撃ではなく、攻撃に対する反撃である」と看破していた。

しかし攻撃を受けること (被害) は、必ずしも反撃としての怒りを導くとは限らない。怒り以外の、恐怖や驚きになる場合もある。その違いをもたらす条件は何なのか。今、a: 交通ルールを無視

した車にひかれそうになった場合と、b：自分の方が交通ルールを無視して（車道に立って）車にひかれそうになった場合とを比べてみる。aでは恐怖とともに怒りが、bでは恐怖のみが際立つだろう。aとbの違いは、交通ルール、自分たちが共有しているべきルールとの関係にある。aのように自分の存在は脅かされなくても、ルールの方が脅かされた場合怒りとなるが、bのように自分自身がルールを犯している場合は、恐怖のみが前面に出る。もちろんaの場面でも自分の生存の危機が大きければ、恐怖が前面に出るだろう。しかし危機が小さければ、恐怖は小さく、怒りが前面に出るだろう。すなわち恐怖に代わって怒りが励起される条件は、自分の存在の危機に対しては余裕がある場合といえる。踏みにじられそうになったのは自分の存在では（まだ）なく、ルールなのである。したがって怒りの感情を言葉で端的に表現すれば、「許せない」ということになる。「許せない」とは、「私は正しく、相手が悪い」という明快な倫理的状態であることを示している。すなわち怒りには、正邪の所在と「許すことの可否」が前提になっており、その可否の基準で許せないのである。怒りとはいつでも「正義の怒り」なのである。

怒りの要件、それは「許せないこと」の発生である。その発生を可能にするものは何か。その発達の起源を乳児が示す不快反応・泣く行動に求めることができる。その反応は、怒りの原初反応として大人の怒りを投影した解釈も可能であるが、実際には、身体的不快（空腹を含む）や嫌悪（忌避）と混合している。それらは、快適状態からの逸脱の表明を意味している。それらの不快反応が、怒りとして分化していくには何が必要なのか。すなわち、怒りを発するために必要な内的能力、その何かを、概念装置として想定せざるをえない。それを本稿では「原規範」と名づける。

4.1 原規範

原規範とい名称は、個体発生的に原初の規範を意味し、規範以前の状態をも含意している。その原初状態では欲求と未分化であり、いわば「イド」と「超自我」が未分化な状態を意味している。原規範は、やがて成熟していく個人的規範や社会的規範の誰もが備えている原形であり、利己的欲求のような社会規範から排除されるものを含んでいる。個々人の原規範があるから、その公約数的合意としての社会規範が出来上がり、また個人の原規範に由来しているからこそ、外在の社会規範を受容し、それを自分の原規範と融合（内面化）することができる。

そして最初の怒りは、「（今私は）不快である」ということから、「（私が）不快であることは許せない」という規範化の発生の瞬間であり、欲求が規範化された原規範の成立（と同時に感情能力の構造化）を意味している。原規範においては欲求と規範とは矛盾しない。

すなわち怒りは「私の原規範が侵害された」体験として与えられる。そして侵害の行為主体が明らかになると、侵害する者＝「悪い奴」の存在に気づく。怒りの表出は、攻撃ではなく、相手の「悪い」行動を阻止する反応であり、相手に自己の規範に従わせようとする反応である。怒りの表出は、おのれの原規範の表出・実現化への意志である。

このような原規範は、社会化によって、欲求優位の原規範から社会規範優位の原規範へ、さらには宗教的な超越的（超法規的）規範へと変化しうる。たとえば成人においては、個人の欲求不満よりも宗教的正義の侵害に対してより深刻に怒ることが可能となる。すなわち、怒りは幼児の怒りも聖職者の怒りも等しく原規範の違反という現象であり、ただその原規範の構造が異なるのである。

原規範の構造化というモデル的仮説は、宗教指導者の「神に代わっての」怒りを幼児的な欲求不満に還元する発想を拒否する。また怒りやすさ（易怒性）を個人のパーソナリティではなく、準拠し

ている原規範の構造の硬さで説明しようとする点で社会心理的である。

4.2 原規範の構造

怒りを可能にするものをすべて「原規範」(成熟した規範を含む)とするならば、次には原規範の内部構造に目を向ける。原規範の内部構造は、少なくともその規範的側面においては、慣習法である作法の構造と同型とみなし、作法学における作法の構造(山根、2004)から援用すると、まず(原)規範は個別の「規範素」と、その構造的集合体としての「規範体」からなる。

そして規範素は、作法命題のような4要素の結合、すなわち、

規範素＝条件素＋行為素＋機能素＋評価素

として記述できる。この結合は「～の場合、～するのは、～だから、許せない」という形で表現できる。もっとも、この規範素は当人が内的・事前に言語化していることを意味しない。むしろ個別の規範素は怒りの発現に伴ってはじめて顕在化する場合があり、構造化された規範体そのものは自覚されえない。怒りは完成した原規範構造から論理的に演繹された結果の反応ではない。

規範素の各要素をみると、まず条件素は、同じ行為でも評価素(許せなさの度合い)を異ならせる要素である。条件素には時や場合のほか、行為者の属性なども含まれる。行為素には、行為の有無レベルと、為された行為の行動レベル。たとえばスピード違反でも、その違反の有無と、その時の車の速度の2段階がある。行為素も評価素に差異が反映することで意味をもつ。機能素は、損害の種類であるが、必ずしも損害が明確に自覚され、程度が斟酌されてはじめて怒るというわけではない。行為の時点で怒りは惹起するのであるから、機能素は構造的に無自覚なレベルに深層化されていることが多い。これを明示化することが怒りの学的探求の目的にもなる。評価素は、可否の二値だけでなく、許容度という定量的変化をなすうる。

前者は柔軟性のない硬い構造であり、後者は条件素・行為素の複雑な組み合わせに対応したより分化した構造を意味する。

人間の怒りを、たとえば、さまざまな場面においての怒る閾値を探るような微細な視点で探求するなら、この原規範の複雑な構造を分析することを覚悟しなければならない。動物のなわばり行動や定位行動の阻止だけで人間の怒りの構造を理解することはできない。

ただ、原規範が怒りのすべての源泉であるとはかぎらない。たとえば、いつもなら怒らない条件素・行為素の組で怒ることがある。日常では「虫の居所が悪かった」と解釈されるこの現象は、規範構造とは別の要因が作用したのかもしれない。すなわち、怒り以前の情態が、すでに怒りを導いている場合である。これは典型的でない怒りとして、怒りの下位感情(5.1)として後述されよう。

4.3 他の条件

原規範以外の発生条件として、原規範に違反する外力(行為)の必然性の問題がある。まず、自分の原規範に違反する不快が、自分の身体から発した空腹や腹痛である場合は、怒りの感情は生じない(文学的比喩を除いて)。また、災害を与えた自然の力に対しても、怒りよりも恐怖感情が前面に出る。ところが災害が防災の不備などの人災的側面があると判明すれば、「許せない」対象となり、怒りが生じる。すなわち、不可抗力としての原規範の違反は直接には怒りを導かない。

同様に、赤児が器物を汚損しても、成人がした場合よりは、怒りは引き起こされにくい。すなわち、違反の故意・過失性が認められないと「許せない」という怒りには直接結びつかない(「責任能力」という法的概念が成立しうるのも、原規範構造と整合するためであろう)。

また、被害自体が怒りに与える影響もありうる。たとえば、被害の回復可能性が皆無の場合、喪失感という悲しみが優勢になり、怒りは目的を失な

うことがある。直接の被害を他の問題に転化できれば、怒りも転化できる。たとえば、加害者の法的処罰が軽すぎると感じた被害者は現行の法律や司法機関を新たな怒りの対象にできる。

以上をまとめると、この感情の発生に前提されている要件には、基準となる原規範、違反の故意・過失性、存在の危機の程度、被害の回復可能性などが考えられた。

4.4 怒りの体感

怒りは怒っている当人にどのように感じられるのか。これこそが真に把握したい、そして最も困難な問題である。幸いなことに、情動的興奮の典型である怒りは、体感、シュミッツ (1986) の表現を使えば「身体的揺動」(leiblich Rongangen) として体験されるため、この身体的揺動感の表現は、怒りそのものの程度表現として使われている。日本語での怒りの揺動感を挙げてみる。

①ムカつく：不機嫌になるレベルで、表情でも一瞬の怒りのサインが出る程度である。これは怒りを表出させない意思がはたらいている状態で、立腹よりは弱い怒りを含意している。表情的表現である「ムツとする」もここに含められる。むかつく部位は胃か胸あたりであろう。「マグマの加熱」と比喻できる。

②アタマにくる：加熱した「マグマの上昇」状態であり、怒りを抑えることが困難になり、たとえば怒鳴り声として表出される。

③キレる：噴火＝爆発状態で心がすべて怒りそのものとなる。「逆鱗に触れる」に相当し、怒りに支配され、あるいは身をまかせせる。

これらの体感表現は、怒りの強度の度合いをも意味し、強度の高まりが興奮部位の腹から頭への上昇に対応した表現になっている。これは交感神経興奮による身体変化の様子だけでなく、理性(頭脳) そのものを麻痺させる度合いも表現されている。

怒りの強さは、原規範が違反(否定)された度合いに対応し、またその違反が過失より故意の場合の方が強い。

4.5 怒りのゆくえ

感情には「蓄積性」という性質を仮定できる。蓄積性とは、時間を経過して存在し、時を異にする同じ感情が結合する性質をさす。すなわち、行為が終っても感情が持続し、潜在化された強度(表出されていないが表出された時の強度)が強まる、という性質である。これは情感性の常在性に由来する。

ただし蓄積性の能力は個々の感情によって異なる。たとえば、驚きはまったく蓄積できない(むしろ二度目には驚かなくなる)。それに対して、愛情・嫌悪は蓄積しやすく、怒りもまた蓄積しやすい。

感情は蓄積によって深層化もされる。深層化とは、現在的・自覚的に体験していない状態になることで、感情は持続しているが表出も表象もされていない状態になる。それゆえに、爆発する怒りは、その場での怒りではなく、過去からため込んだ怒りを伴っている場合がある。その場合、その場においては不自然に強すぎる怒りとなる。

これは怒りが次の別の場面に、情態として編入することを意味する。怒りは怒りの場面を超えて持続する。なぜ怒りは消えずに持続するのか。それは逆に怒りがなぜ消えるのかという問題(5.3)と関係する。

また、ごく短期の蓄積性として、感情の自己強化現象がある。怒りやおかしさ、悲しみなどは、その感情に浸るとさらにその感情が強化される場合である。自己強化は特定感情への集中化による自己蓄積・遍在化であって、強度だけの単純な増加ではない。「泣くから悲しいのだ」というジェームズ・ランゲ説はこの自己強化現象、すなわち「悲しい→泣く→さらに悲しくなる」というサイクルの後半部のみを言っているにすぎない。

5. 怒りの意味空間

次に怒りの意味を、感情の意味構造における他の感情との対比などによって抽出してみる。といってもこれは感情を既存の言語的意味構造にあてはめることではない。むしろ感情こそが、言語発生以前からの意味作用そのものであったのだ。

ただし感情全体が開く意味空間の中に怒りをプロットするのではなく、怒りとその周辺の感情との関係性に注目することで、怒り固有の感情的意味を明確にしたい。意味構造には、下位分類という内部構造と、類似性と対立性という外部構造がある。

5.1 下位感情

広義の怒りに属する感情には、特定域の強度を示す感情に特定の名称を与えられている場合や、典型的でない変異タイプ、他の感情を混合している場合などがある。「ムカつく」や「アタマにくる」など特定強度の怒りは前述したので、変異形を問題にする。

①イライラ・ムシャクシャ

怒りは爆発であるが、イライラは爆発というより加熱沸騰段階であり、強度でいえば激昂する前段階としての怒りを我慢できている状態、あるいはある程度弱い怒りの持続態である。たとえば、重大な原規範違反でないが、相手の反応が自分の思い通りではない、言うことをきかない場合、イライラする。

また、怒りはすぐにおさまらずに、怒りの余韻としての気分が残る。この気分が持続するイライラやムシャクシャという気分状態になる。

ムシャクシャがイライラと異なる点は、対象から分離し、気分化した点である。イライラは対象が眼前にあるのに対して、ムシャクシャは「許せない対象が在る」という情態ではなく、許せない

自体に敏感になっている。許せない相手が不明確であるだけでなく、何が許せないのかも不明確になっている。その場合には、何かに向かって怒ることができないため、自分でもどうしているのかわからず、周囲のあらゆるものが許せなくなりやすい情態となる。許せないことが転移・拡散しそうな情態である。

②癪癪

たとえば幼児が自分の要求を受け入れない親（他者）やうまく扱えない玩具に対して示す激怒である。通常の激怒と異なるのは、原規範による理想状態を実現できないコトが許せないのであり、怒りの表出は必ずしも人ではなく、そのコトを構成するモノ、たとえばうまく扱えない玩具へ向く。幼児にとっては欲求の原規範との落差そのものが癪癪の種となる。成熟した怒りのように事態を原規範に回復させる志向をもたない、怒りの前半部のみの爆発態という意味で未熟な怒りである。

③不貞腐れ

たとえば、自分のした行為に誰も感謝をしてくれない時の怒りが該当する。非爆発的な弱い怒りを示すが、イライラとは異なるのは、自分が充分正当でないことを自覚している点である。すなわち欲求的には不満であるが、規範的には違反でないことが分かっている事態であり、原規範において欲求と規範とがある程度分化（成熟）した精神性を前提としている。

不貞腐れが示す不十分な・遠慮した怒りは、怒りを理性で抑制しているというよりも、自分の怒りが100%正しくはないことを自覚しているがゆえの、自信のなさ・後ろめたさという感情を併発しているためである。自分の怒りが受け入れられないこと、表出することの正当性のなさを自覚している（ただ不満であることはわかってほしい）。怒りの対象に怒りを向けられないが、それでも表現したいというジレンマを内在した複雑な怒りである。その意味で精神的にある程度成熟した怒り

である。他の感情が混在している純粋でない怒りのひとつである。

④憎しみ・恨み

怒りの対象が行為ではなく、その行為者に固着した場合、それは怒りから憎しみとなる。たとえば怒りの行為が繰り返された場合や回復不能な損害を受けた場合、怒りは行為者に向けられる。行為者に固着するとは、その行為をやめても感情がおさまらないことを意味する。ならどうすればおさまるのか。憎しみは存在者レベルではなく、存在レベルの感情に深化している。それゆえ行為者の行為ではなく、行為者の存在そのものが問題になる。すなわち存在しないことを、端的に言って相手の死を願う。

憎しみは自己の損害とはかわりなく、社会的正義に対する強い違反者に対しても起こる。この点が次の恨みとは異なっている。恨みは、憎しみの一変種といえるが、相手の違反性よりも自分の被害性が問題である時、たとえば自分の愛が裏切られた場合に生じる。原状（愛情関係）回復への執着があると、愛憎のアンビバレント状態になる。

⑤嫉妬

嫉妬は三者関係での怒り（恨み・憎しみ）であり、その分複雑な様相を示す。たとえば関心対象（異性、大衆等）が自己のライバルに対して自分よりも高い評価（愛情）を示した場合（図2）、ライバルに対しても関心対象に対してもそれぞれ別個の怒りを感じる。それが嫉妬である。

ただし関心対象の行為に、正当性が認められる

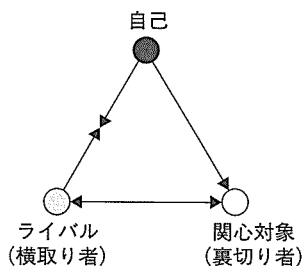


図2 嫉妬関係の構造

場合は、不貞腐れとなる。自分に完全に正当性が認められる場合は、関心対象へはライバルへ走ったという裏切り行為に対する怒り、ライバルに対しては横取った行為として更に深刻な怒りである憎しみを抱く。嫉妬の怒りの根拠は、関心対象への専有権の侵害であって、「愛」は前提条件ではない。

嫉妬は通常の怒りのように堂々とは表出されず、本人も表面化しないよう努力する。嫉妬している本人は「別に嫉妬しているわけじゃない！」と言語的に否定さえする。これは嫉妬が自覚しにくい（明証でない）からではなく、嫉妬が自己否定したがるのである。なぜなら、嫉妬するということは、自分が規範的には正当であっても、関係上は負けたことを認めることであり、関心対象の愛や称賛が自分からライバルへ移動されたことを嫉妬しているからである。嫉妬の傷は対象の喪失ではなく、自尊心の傷である。嫉妬は怒りだけでなく、みじめさ・敗北感をも発生させる。これらの感情があからさまに怒りを表出することを抑制させる（ただし怒りを表出する力は失ってはいない）。

このように嫉妬を構成する感情には、規範による正邪とは別の関係上の勝敗という基準がかかわっている。

⑥叱り

叱りは、叱るという行為であり、感情ではない。怒りと叱りは場面として並立していても感情と行為という相互に異質の次元の存在者である。しかし少なくとも表出レベルでは怒りと共通している。叱りは、相手の違反を糾すという制御目的と同時に制裁そのものでもある。その制裁とは、「お前が悪い」という指弾・屈辱を甘受させることを意味する。

一般的に制裁者であるには制裁の行使権をもつ権力者として社会的高位にあることが前提されてもいる。したがって叱る者は自分の正義を相手に振りかざしてよいという社会的力（の差）が前提

される。いいかえれば、高位者による怒りの表出は、社会的な叱りとして機能する場合が多い。叱りはこのように原規範に回復させる目的行為であり、怒りの後半部が半ば独立して行動化したものである。その意味で怒りが成熟・分化した姿である。

叱りはあくまで叱られる者と共在した社会的行為次元の現象なので、実際に怒っているか否かは要件にはならない。怒りの表出を伴わない冷静な「説諭」には叱りのような制裁の効力はないが、部分的にも怒りの演技（にらむ、怒鳴る）によって叱りは成立する。

叱りは「自分が正しく、相手が悪い」という状況そのものの顕現であり受容を求める社会的行為である。叱りが社会的行為として有効であるには、自分の怒りに自信を持っている必要がある。他の原因によるイライラや嫉妬があらわな怒りは、叱りとして相手に受容されにくい。

5.2 類似感情

類似とは共通性と相違性を合わせ持ち、類似性の方が明白に大きい状態である。下位感情より相違性が大きく、本質的に別の感情である。いずれにせよ、どこが共通で、どこが異なるのかを明確にすべきである。

怒りの類似感情には、「許せない」という規範的反応ではない不快感情である「嫌悪」が該当する。嫌悪は、発達の最初は不快反応として怒りと分化していない。対象への拒絶が共通している。そして嫌悪が怒りになるときがある。たとえば、嫌悪するものを意図的・執拗に呈示された時、嫌悪と怒りの二重の感情体験をする。その場合の嫌悪は、目の前に在ることが不快・しかも感覚的な不快である。怒りは、呈示する行為が許せないのであり、嫌悪対象に対する怒りではない。

一方、いじめや社会的少数者への差別は、嫌悪対象となる人間が目の前に在り、それが嫌悪対象にふさわしくない標準的な行為をしているだけ

で、差別的な規範に違反した生意気な行為として怒りの対象となる。

5.3 対立感情

対立とは、相違性と意味空間の軸を構成する上位の次元での共通性という2段階の意味階層をもった関係である（相違性のみの関係は、無関連というもっとも遠い関係である）。その対立性の意味的相違によって、以下の反対・矛盾・無化感情に分ける。

①反対感情：恐れ

恐れは怒りと意味的反対である。意味的反対とは、怒りが行動化する攻撃とは逆方向のベクトル（逃避）を持っている点である。攻撃される側でありながら反撃不能な場合である。捕食者・自然災害に対してのように、それは存在の重大な危機を意味する。といっても怒りと恐れは両立可能である。その場合は、行動・表情レベルでも明らかに併存し、ジレンマ的反応となる。

②矛盾感情：罪悪感

矛盾感情とは機能的に対立しており、択一的で両立できない感情である。罪悪感とは、自分の不義性が存立していることであり、「私が悪い・申し訳ない」という気持ちである。「許せない」のが自分側であることで、自らの原規範違反を意味する。これは怒りを受ける側に期待される感情である。すなわち正しい怒りとは、相手が罪悪感を抱くべきものを意味する。神の怒りが人に罪の意識をもたらしように。

③無化感情：許し

無化感情とは存在している感情を消滅させる機能であり、最も対立性が強い。怒りを消滅させる感情は（行為ではなく、感情としての）許しである。許しは「お前は悪い」から「悪くない」へと評価転換する感情過程である。この感情こそが怒りを正しく沈静させる。しかし本来「許せない」から怒るのである。そのような確信に満ちた怒りを許しに転換させるのは、ひとつは罪悪感の表明

としての謝罪行為である。また相手の謝罪がなくても、こちらの認知構造を変える、すなわち規範素の条件素や行為素を入換えて、別の規範素に置き換えることで違反でなくなる（ただしこの認知転換は感情転換としての「許し」ではない）。

6. 体験した怒りを理解する

怒りは、その本人にとって正当な理由があるから怒るのであり、自己（の正義）を守る正当防衛的な感情である。だから怒りはやみくもに抑制されるべきものではない。その怒りを抑えるべきかどうかはその怒りの根拠を吟味したうえで判断されるべきである。

怒りにおいてあらわになるものは、糾弾の根拠となっている原規範である。怒りを理解し、その適切性を吟味するには、怒りを正当化している原規範を抽出する必要がある。たとえば以下の手順で。

- ①その怒りの状況を語っている規範素を抽出する。すなわち「～のとき・場合、～することは、～なので、許せない」という形式にあてはめる。
- ②条件素・行為素の連合と機能素（違反の根拠）との対応関係が正しいか吟味する。機能素には、感情的不快（嫌悪、屈辱、悲しみ）も含まれる。
- ③機能素と評価素の対応関係が正しいか吟味する。評価素は二価ではなく多価の程度表現にする。
- ④この規範素の構造的把握のために、条件素や行為素を変換した場合、機能素・評価素の値が変わるか試してみる。たとえば同じ条件素で、どのような別の行為素であったならば、「許せる」という評価になるかを試行錯誤してみる。この代替行為が見つければ、それは人を怒らせない行為素として一般的に採用する価値をもつ。
- ⑤どうすれば怒りがおさまリ、感情の快適さが回復するか。怒りの規範素を無化するような別の規範素を考える。たとえば、「～したとき、{行為を

停止/謝罪/損害賠償} することで、～なので、許すことができる」。

この一連の作業、すなわち自己の原規範に距離をおくことによってあらわになるのは、原規範の構造を基礎づけている価値観・思想であり、また構造的矛盾としての自己中心性や偏見などである。

文献

- Ekman, P. & Friesen, W. V., *Unmasking the Face*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1975 (P. エクマン & W. V. フリーセン「表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる」工藤力訳編 誠信書房 1987)
- Heidegger, M. *Sein und Zeit*. Sonderdruck aus: "Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung", Band VIII. Unveränderte 4. Auflage, 1927 (M. ハイデガー「存在と時間」原佑訳 中央公論社 1980)
- Henry, M., *L'essence de la manifestation*, Presses Universitaires de France, 1963 (M. アンリ「現出の本質」北村晋・阿部文彦訳 法政大学出版局 2005)
- Izard, C. E., *The Psychology of Emotions*. Plenum Press, New York, 1991 (C. E. イザード「感情心理学」荘厳舜哉監訳 ナカニシヤ出版 1996)
- Schmitz, H., *Phänomenologie der Leiblichkeit und der Gefühle*. (H. シュミッツ「身体と感情の現象学」小川侃編訳 産業図書 1986)
- Seneca, L. A., *De Ira De Providentia* (L. A. セネカ「怒りについて」茂手木元蔵訳 岩波書店 1980)
- 山根一郎「作法学の誕生」春風社 2004
- 安田一郎「脳と情動」青土社 1993

やまね・いちろう/文化情報学部助教授

E-mail:yamane@sugiyama-u.ac.jp